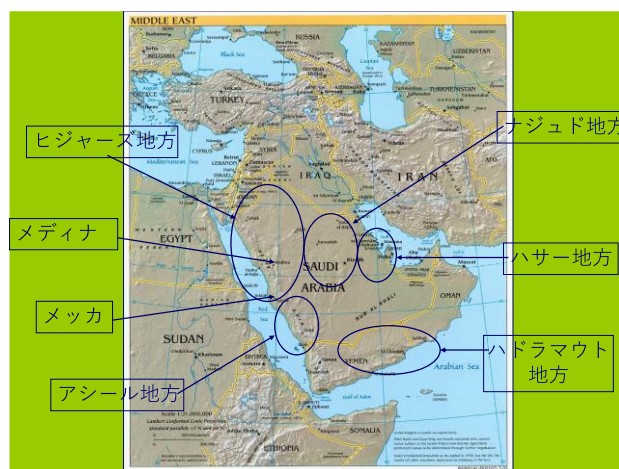


講義ノート (3)

こんにちは。第3回です。今回はサウジアラビアのヒジャーズ地方でおこなったベドウィン調査についてお話しします。前回は「報告」のない旅、つまりフィールドワークとは見做されないケースについて考えましたが、今回以降は「報告」がありますので、フィールドワークということになります。第1回目の授業で、フィールドワークにはさまざまな形や契機があるということを示しましたが、そのなかで今回お話しするのは「他の仕事の付随物」といってよいでしょう。ただし仕事といってもモノを売るとか作るといったいわゆるビジネスではなく、それ自体調査ではあったのですが、いわゆる民族誌につながるような目的を持った調査ではありませんでした。結果的に民族誌をもたらした、というケースに当たります。

ではどういう調査(仕事)であったのかということから始めましょう。古い話で恐縮ですが、1973年から1974年にかけて、パシフィック航業(現PASCO)という日本の航空測量会社がサウジアラビアの石油鉱物資源省という役所から受注したサウジアラビア国内地図作成プロジェクトの一環として、ヒジャーズ地方北部の地名調査を実施しました。ヒジャーズ地方というのはサウジアラビア北西部の、メッカやメディナを含む一帯の名称です。イラクやヨルダンと国境を接し、またアカバ湾を隔てて当時はイスラエル軍の占領下にあったシナイ半島とも接するという広大な領域です。歴史的にはイスラーム誕生の主舞台となったひじょうに重要な地域です。下図で場所を確認してください。



さて、このヒジャーズ地方の北半分を地図化しようというわけです。会社はこの数年前か

ら北部の国境線画定作業や上空からの航空写真撮影などは済ませていて、いわゆる地形図を作ることは問題がなかったのですが、地図上に落とし込む地名の蒐集という作業が残っていたのです。地名蒐集のためには現地赶赴いて、そこに暮らす人たちの話す言葉つまりアラビア語を聞き取ることができ、かつそれをアラビア語で記録できる人材が不可欠なわけですが、日本でそういうスタッフがどこにでもいるということはありませんでした。しかも現地のほとんどは砂漠ですから、そういう過酷な環境での作業に耐えうる体力を持った人、つまり若者が要求されたのです。

この難儀な人捜しに際してキーマンとなったのが高井清仁という人です。この人は大学（東京外国語大学アラビア語学科）を卒業したばかりだったと思いますが、若かったけれどひじょうにアラビア語がよくできる人で、その後何冊かアラブ文学の翻訳書を出していますので、関心のある方は Amazon などで検索してみてください。ちなみに私はこの人ほどアラビア語能力に秀でた人をその後も知りません。ただ残念なことに、高井さんはその後 1991 年だったと思いますが、40 歳くらいの若さで亡くなりました。この高井さんは顔の広い人で、パシフィック航業の話を持ってきて、地名蒐集のメンバーを探し始めたのです。まずは大学の同級生だった栗原剛さんという人を誘い、順序はよく覚えていませんが、前後して私にも声をかけてくれました。私は当時大学 3 年生で、高井さんにとっては同じアラビア語学科の後輩ということになるのですが、どこかで私の〈第 1 の旅〉の話でも聞きつけたのだと思いますが、生意気そうだけれど元気のありそうなヤツ（笑）、ということだったのでしょう。私はどうも大学というところがあまり好きではなかったのに、在学中にもかかわらず、この話に乗ったわけです。そしてもう一人、やはりアラビア語学科で高井さんのちょっと先輩にあたる本田孝一さんという人がいます。本田さんは今では国際的にも有名な日本を代表するアラビア書道家で、彼の作品は大英博物館にも所蔵されています。ウィキペディアにもものっていますし、「本田孝一」でググればたくさん項目が出てきます。『深夜特急』で有名な作家の沢木耕太郎が本田さんを主人公にした短編も書いているので、関心のある人は読んでみてください《沢木耕太郎『彼らの流儀』(新潮文庫) 1996》。ともあれその本田さんが銀座の路上で偶然高井さんと出くわし、サウジ行きを誘われたのだそうです。



左から高井清仁、栗原剛、堀内正樹（私）、本田孝一の各氏  
サウジアラビア・ジェッダのホテルの屋上で（1973年）

こうして4人のメンバーが決まり、「Northern Hijaz Mapping Project」という地名調査が開始されました。コアメンバーは我々4人で、それに会社の事務系、技術系の人たちやテクニカル・スタッフなどが加わり、日本人だけで十名程度の調査チームができあがりました。それに現地で採用した運転手やコック、雑用係、人夫などが加わり、多いときで総勢20～25名前後の「部隊」が砂漠の中を移動したのです。とはいっても、いつも全員が一緒にいたわけではなく、まず拠点となるメイン・キャンプを設営し、そこに物資や調査機材などを集めておいて、必要に応じて離れた場所にサブ・キャンプを張る。そこから我々4人が原則単独でその日の分担区域へ出かけて行き、地名蒐集作業を行う。作業にあたっては一人ずつにトヨタのランドクルーザーという砂漠にはめっぽう強い四駆があたえられ、それぞれ専用の運転手が付けられました。そして行く先々でベドウィン（砂漠に暮らす遊牧民をベドウィンといいます）にインフォーマント（情報提供者）兼ガイドとして助手席に乗ってもらい、砂漠を縦横無尽に走りまわりながら、我々が手にした航空写真や地形図と眼前の風景を照合しつつ、山や谷や村やオアシスなどの名前をそのベドウィンから聞き出して記録する。

ところでこの調査は、当初の計画では夏の酷暑を避け、比較的過ごしやすい秋から冬に実施されることになっていました。ところが日本で出発準備をしていたときに、折悪しく第4次中東戦争が始まってしまったのです。順調な船出というわけにはゆかなかったんですね。この戦争はエジプトやシリアがそれまでの3回のイスラエルとの戦争で負け続けた劣勢を挽回しようと、エジプトがシナイ半島で、シリアがゴラン高原で、それぞれイスラエルに先制攻撃を仕掛けて始まったのです。そしてあとからヨルダンも加わったため、はたして戦場に隣接するヒジャーズ地方で調査が実施できるかどうかおおいに気を揉みました。しかしすでにジェッダ（サウジアラビアの最大都市で、この調査の本拠地となりました）に先遣隊として入っていた人たちから「大丈夫そうだ」と連絡をもらい、まだ戦争が終わっていない

のに、見切り発車で我々は日本を発ったのです。1973年10月中旬のことでした。----ここで余談になりますが、当時は飛行機の航続距離が短く、我々の乗った飛行機は香港、バンコク、デリーでストップオーバーし、カラチに着きました。ここで一泊してサウジ航空に乗り換え、サウジアラビアのダハラン経由でジェッダに着いたのです。---

さて、現地に到着したからといってすぐに調査を始められるわけではなく、ジェッダで約1ヶ月半、一から品揃えを始めました。自動車の手配、テントやマットレスやテーブルや椅子、梯子、ファン、ドラム缶、発電機、清涼飲料水等々、調査機材を除くとほとんどすべてが現地調達でした。この間ジェッダの町の中を買い物のためあちこち歩き回ったおかげで、ずいぶんジェッダの町には明るくなりました。またこのときに学んだことがあって、日本でニュース報道を見ていたら、戦争が始まって、まるで中東全域が戦火にさらされているかのような印象を持たされたのですが、なんのことはない、多くの場所では人々がごく普通の日常生活を営んでいるじゃないか、という当たり前の事実でした。それは、この準備期間中に数日だけレバノンへ行ったのですが、レバノンでも様子は一緒だったことから、なおさらその意を強くしました。見ると聞くでは大違い、人の話は当てにならないなあ、ということを感じ、それは今日に至るまで続いている認識です。やはり現場が重要なんです。

さて、準備の整った私たちは11月下旬にジェッダを出て砂漠に入り、メイン・キャンプを数カ所移し替えながら、3月下旬までの約4ヶ月の砂漠暮らしをしたのです。調査は順調にゆくときもあれば難儀をすることもあります。まず天候の問題です。雨と風が大敵です。砂漠に雨というのはイメージ的には結びつかないかもしれませんが、ヒジャーズ地方の冬は雨が結構降ります。そうすると地面がぬかるんで四駆でも往生することがありますし、もっと危険なのは鉄砲水です。ワーディー（「涸れ川」と訳されることがありますが、降雨の時だけ水が流れる谷のこと）の上流に降った雨が地面に染み込むことなく一気に流れ下り、下流に被害をもたらします。3月上旬にヨルダン国境に近いグライヤート・ナブクという町から調査に出たとき、それまで鼻歌を歌いながらご機嫌だった私の運転手のウベイダッラーが、同乗していたベドウィンに促されてはるか彼方の山の方に小さく光る点を見つけるやいなや血相を変え、急にスピードを上げて、普段は静かに運転してくれるのに、そのときは私が何度も天井に頭をぶつけてもお構いなしの荒っぽい運転で、脇目も振らずに無言で、幅の広いワーディーを渡りきりました。向こう岸の高台に着いて、やれやれと一服していると、やがて眼下に大量の泥水の濁流が流れてきたのです。この流れに捕まっていたら、当然命はありませんでした。遠くに見えた光の点は降った雨水が太陽光に反射していたのですね。我々のいた場所まで流れ下ってくるのはあつという間だったわけです。ですからベドウィンはたとえほとんど雨の降らない夏であってさえも、ワーディーの中にテントを張ることはめったにありません。

雨はそうした怖さを伴っているし、だれもいない山の中で冷たい雨に晒されるときのはたしや悲しさは言いようありません。しかし冬の雨期の終わりには、普段はカサカサの砂

丘の表面にも、数日間限定ですが、赤や紫のレンゲの花が絨毯を敷き詰めたように一面に咲き誇ることがあって、その美しさには圧倒されます。それにあれこれ言っても、やはり雨は命の水の源ですから、まとまった雨が降ってきたとき、メイン・キャンプのアラブ人スタッフたちが濡れながら喜んで踊っていたのを思い出します。

さて風ですが、これには閉口しました。なんのプラス面もありません。砂嵐の頻度は冬はそれほど高くはありませんでしたが、一度やってくると車もテントも至る所砂だらけになり、後始末が大変です。砂漠生活で気になったのは、普段でもちょっと強い風が吹くと砂塵が空高く舞い上がり、遠くの視界は効かなくなります。そして砂塵が地面に落ちてきて収まるのはだいたい明け方なので、夜間は闇夜になってしまいます。星が見えないんですね。「ベドウィンは日中の酷暑を避けて、夜間に星座を頼りに移動する」なんていうロマンチックなことを言う人も世の中にはいるわけですが、それは嘘だなあと思いました。ここでもまた見ると聞くでは大違い。

風についてはもう一つ。調査中、数多くのベドウィンと行動を共にしたわけですが、眼病の人がかなりいるのに驚きました。それほど年をとっていない人でも眼病を患っている。太陽の紫外線の強さももちろん原因でしょうが、同時に風で運ばれてくる砂塵が原因であることは間違いありません。砂漠生活で眼をやられるというのは致命傷になります。ですからまだ老齢というわけでもないのに砂漠での生活を切り上げて、村や町に定住する人も少なからず見られました。

さて話をベドウィンの方に移しましょう。なんといってもこの調査の主役はベドウィンですからね。ベドウィンがいなかったら仕事になりません。我々とベドウィンとの接触がどういう様子だったのか。我々は拠点となるメイン・キャンプを設営する際に、まずはその地元の「アミール」と呼ばれる人を訪ねます。地元の最高権威者とでもいうのでしょうか。部族長あるいは見方によっては知事といってもよいでしょう。彼は地元を代表して首都リヤドのサ우드王家(=サウジアラビア政府)とのあいだにバイアという統治契約を結んでいます。そしていわば自治権を有する代わりに、サ우드(サウジ)王家の監督や指示を受け入れるといった互恵的關係にあります。決して王家の下僕や部下などではありません。アミールはだいたい地元の中心的な町に居を構え、客人を迎えたり部族民に相談場所を与えたりするためのゲストハウスを屋敷地内に持っています。我々のような外部者が彼の管轄地域内に入って活動する場合には、事前に彼の了承を得る必要があります。もちろんリヤドの内務省から連絡は行っているはずですが、政府の許可と地元の許可とはまた別なんです。～～ちょっと脱線しますが、サウジアラビアは昨年ようやく外国人に対して観光ビザを発給するようになりましたが、それまではサウジアラビア政府の招待やサウジアラビアの企業の招聘状がなければ、外国人は入国できませんでした。我々は石油鉱物資源省が発注した仕事をするので当然何の問題もなかったわけですが、外国の個人や団体が自己都合で、あるいはなんだか訳のわからないような調査をしようとして入国申請しようとしても、滅多に

許可されることはなかったと思います。しかも許可されたとしても、それはジェッダやリヤド、ダンマン、ダハランといった政府（＝王家）直轄の大都市でのビジネスや国有地（油田や軍用地、国営農場など）での活動に限定され、地方の砂漠の中を自由にうろつき回るなどということは、外交特権を利用する場合でも、あり得なかったのです。その意味で、この調査はベドウィンと自由に接する貴重な機会だったと思っています～～～

さて、政府の許可があっても地元ではアミールの許可が必要になりますから、行く先々でまずはアミール詣でをしますが、外国人や町からやってきた政府の下っ端役人が初対面でぶっつけで行ってもなかなか上手くゆきません。相手がだれであれ、どこの馬の骨ともわからないヤツがやってきて、「はい、どうぞ」ということはあり得ませんよね。そこで「顔つなぎ」をしてくれる人物が必要になります。地元で信用を得ている人物で、よその部族のあいだでもある程度顔を知られている人物がうってつけです。あるいは少なくとも地元でコネクションのある人物というのが最低限の条件になります。我々の場合、最初にメイン・キャンプを設営したタブークという町（現在ではタブーク県という県の県庁所在地になっていて、北ヒジャーズ最大の拠点都市ですが、当時はまだ殺風景な田舎町の風情でした）でアミールから紹介されたアブー・アーイシュという貫禄のある人物が、その後も終始我々の調査隊に同行してくれて、各地のアミールへの顔つなぎ役を果たしてくれました。いわば調査隊の顧問だったといってもよいかもしれません。



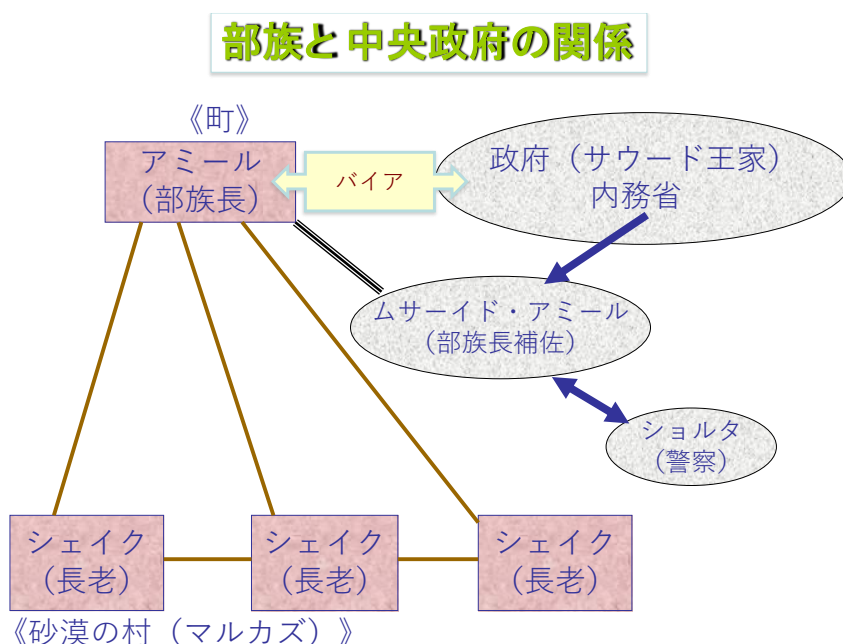
アブー・アーイシュ翁（左から二人目）と私（左）

「アミール」についてですが、多くの場合彼の下には政府から「ムサーイド・アミール」（アミールを補佐する者）と呼ばれる人物が派遣されていて、内務省に属しています。内務省というのはサウジアラビアだけでなく、どこの国でも国内の治安を管轄し、情報をコントロールする怖い役所です。名目上ムサーイド・アミールは補佐役ではありますが、事実上は



アミールを監視し、情報を政府に送る役目を担っているものと思われます。そして彼の下には武装したショルタ（警官）が配属されていて、その地方の治安に目を光らせています。

ショルタは町にばかりでなく、砂漠の中の僻村のような場所にも配属されます。そうした場所は「マルカズ」（直訳すれば「センター」ですが、要は駐屯所）と呼ばれ、ここは地元の部族のシェイクたち（「長老」と訳せばよいのでしょうか、必ずしも年寄りばかりとは限りません。どちらかといえば「有力者」といった感じでしょうか）の、言ってみればオフィスのような性格も持っています。そこに詰めているショルタは必ずしもよそから来た町の間人ばかりではなく、ときには地元のベドウィンが雇われることもあるようです。こうした仕組みを簡単に図にしましたのでご覧ください（下図）。



我々は調査の最中に何度もあちこちのマルカズに立ち寄り、お茶を出してもらうのは常ですが、時には卵焼きを食べさせてもらったり、ちょっとした食事を出してもらったり、雨宿りをさせてもらったり、昼寝をさせてもらったり、あるいはその日たまたま行き暮れて、泊まらせてもらったこともありました。マルカズはテントではなくて、だいたい粗末とはいえしっかりした建物なので、宿泊には便利だったですねえ。周辺のベドウィンも気軽に立ち寄るようで、マルカズは本来のイメージとはちょっと違って、いわば砂漠の中のみんなのサロンといってもよいのかもしれない。

しかし我々がこうしたざっくばらんな関係を持てたのは、ムサーイド・アミールには中央政府から事前連絡が行っているし、アミールには顔出しをして許可をもらっているが故であったことは言うまでもありません。情報に関しては内務省のネットワークと部族のネ

ネットワークが、どんな山奥や砂漠のなかにまでもしっかりと重層的に張り巡らされているので、我々がどこで何をやっているのかというのはほぼリアルタイムで伝わっていたようです。ですから我々がマルカズにふらっと立ち寄っても怪しまれることはなく、むしろ「やっと来たか」みたいな顔をして迎えられることさえあったのです。砂漠や山岳のなかですから電話線が張り巡らされているわけでもなく、まして今のようにスマホや携帯電話があったわけでもないのに、ベドウィンのあいだの情報伝達の早さには驚くばかりです。ですから逆に言えば、得体の知れない不審者が闖入すれば、即座に彼らの情報網に捕まってしまうという怖さも秘めているわけです。

さて、肝心の地名を教えてくれるベドウィンはどのように見つけたのでしょうか。まずオースドックスには、アミールのところへ挨拶に行ったとき適任者を紹介してもらおうということがあります。とはいえ同じベドウィンとはいっても地形や地名に明るい人もいれば、あまりよく知っていない人もいますから、アミールに紹介してもらったからといっても「当たるも八卦当たらぬも八卦」です。うまく当たれば作業はひじょうに効率的に進むのですが、ハズレだった場合にはまた別なベドウィンを探してやり直しをしなければなりません。「自分の暮らしている土地くらい、ベドウィンならみんな熟知しているだろう」と思うのは浅はかで、そうでない人もいます。我々は航空写真と照合しながら自分の位置を確認して進むのですが、ときとして位置を見失うことも多々あります。写真の見方というのは難しいんです。そうなると同乗しているベドウィンに頼るしかないのですが、そんなとき「ハズレ」だったりしたら目も当てられません。地名は知らない、場所もわからないとなったら、日没までにキャンプに戻ることもできなくなります。暗くなったらまったくお手上げですからね。先ほど「行き暮れてマルカズに泊まらせてもらった」といいましたが、まさにそういう状況で、明るいうちになんとかマルカズにたどり着いたという例です。もう今日はキャンプには戻れないな、というわけです。行き暮れて野宿と相成ったことももちろんあります。

とはいえ、ベドウィンが砂漠のなかで自分の位置を見失うということについては、あなたが「無知」とばかりは言えない側面もあるような気がします。我々は航空写真の都合によって、言い換えれば地名がたくさんありそうな場所を写真から判断して勝手に移動します。だから道なき道というか、車のわだちのないところも平気で進みます。(ベドウィンもピックアップ型の四駆を持っていることが多いので、砂漠のなかのどこへ行ってもほとんどの場所に車のわだちがあります。そして走りやすい場所はわだちが集まって踏み固められて、自然に「道」のようになるわけですね。道というのは本来そうやってできたのでしょけれど)。ところが、いくらベドウィンとはいえ、わだちのあるようなそうしたいわば通い慣れた道から外れて、処女雪を踏みしめるような感じで普段通らないようなところへ連れて行かれたら地理感覚も狂うでしょう。そんなときよく経験したのが、ベドウィンが車から降りて、近くの山や丘などの高台にスタスタと登ってゆく光景です。山登りのスピードは速いですよ、彼らは。そして山頂みたいなところから四方を見渡して戻ってきます。そうやって自分の場



所を確認するのでしょうか。

これに関連してちょっと言っておきたいのですが（脱線ばかりで済みません）、高い山や変わった形の山などは地面を移動するとき自分の場所を確認するためのよいランドマークになりそうな気がしますが、砂漠では違うんですよね。移動しているうちに知らずしてちょっと低いところへ行ったりすると、それまで見えていた山など、あっという間に見えなくなります。山岳部では別の山や崖が邪魔して、これもすぐに見えなくなります。当てにならないんです。当てになるのはむしろ逆に低い部分、つまりワーディーの流れ方なんだろうと思います。そのことについては来週また触れますが、ベドウィンが山に登るというのも、おそらく低い部分、ワーディーを確認するためだろうと思います。

まあそういうことはあるにしても、やはり「無知」なベドウィンもたしかにいます。そうした場合、別のベドウィンを探さなければなりません。そこに決まった方法はありません。前に同乗してくれた人が別の親戚や知人を紹介してくれることもありますし、調査している途中で遭遇したり、たまたまテントに招いてくれたベドウィンに頼むこともありました。同じ地域に暮らすベドウィンは当然ほとんどが知り合い同士なので、たまたま通りかかった先でベドウィンのテントがあると、我々の車に同乗してくれている人を介してテントに招き入れられることも度々あるのです。

テントに招かれると、たいていはお茶（シャーイ）を出されるのですが、これがじつは時間がかかるのです。テントの裏に積み上げてある薪の山から少しばかりを持ってきてまず火をおこす。炎が消えて炭火になる頃ポットを乗せて湯を沸かす。それからおもむろに茶葉（紅茶）を入れて、たっぷりの砂糖を加えてからまた火にかける。味見をしながら何度かこれを繰り返してから耐熱グラスに注いで出してくれる。旨いことは旨いですが、グラスをもった右手を左右に少しひねるように振って「もういいよ」という仕草をするまでは、延々とおかわりが出てきますから気をつけましょう（笑）。

ところがこれで終わりならまだいいのですが、「正式には」このあとコーヒーが提供されます。これもまた時間がかかります。まずフライパンを熾火にかけて熱し、そこにコーヒー豆を入れて煎り、煎り上がった豆をミフラーズという金属製のすり鉢に入れ、乳棒でトンカン叩き潰して粉にし、別に熾火の上のイブリーク（とがった口の付いたコーヒー専用ポット。大相撲の優勝力士表彰の時にUAEから贈呈される巨大なものがありますね）で沸かしたお湯の中に入れて一煮立ちさせ、そこにヘイル（カルダモン）やお好みでミスマ（クローブだったかな？）を入れて香りを付け、差し口に藁や草を詰めて漉しながら、お猪口のような小さな陶器製のカップに注いでくれます。砂糖はいっさい入れませんから飲みやすく、クセになります。ちょっとあっさりした抹茶のような感じですね。ともかく、こういうわけですから時間がかかることは覚悟しなくてはなりません。

ちなみにせっかくですから、食事についてもひとこと。一緒に車でまわったベドウィンや近くにテントを張るベドウィンなどから食事の招待を受けることがあります。特にイード・ル・カビール（メッカ巡礼明けの大祭）の時にはずいぶんあちこちのベドウィンからテント

に招いてもらいました。ふだんでもそういうことはありますし、町に住むアミールからゲストハウスへ招待されることもしばしばありました。そういうときに出されるいわば正式な食事は「カプサ」と呼ばれる羊肉の煮込み飯です。羊を屠って血抜きをし、解体してから大きな鍋で骨ごと煮込みます。ベドウィンのテントでは味付けは基本的には塩ですが、アミールの招待の時にはトマト味を加えたり、何種類かの香辛料も加え、ちょっと豪勢なものができるようになります。野菜が入ることもあります。それとは別に炊いておいた米飯を、数人で囲んで食べることができる大きな平盆に盛り付け、その上に羊の煮込みをのせます。スープが別に添えられるので、それをかけて食べてもよいのですが、スープだけで飲んでもかまいません。スープをかけた方が米を手づかみで食べるときには食べやすいので、だいたいはそうします。盛り付けられたカプサの大皿が運ばれてきて床の上に置かれると、5~6人でそれを取り囲み、座って片膝を立てながら右手でいただくこととなります。ただし肉はホストが取り分けてくれるので、勝手に先に手を出すのは御法度です。カプサはアミールの家でいただくときにはだいたいおいしいのですが、ベドウィンのテントに呼ばれたりすると、ときとして米がベチャベチャだったり、肉が羊ではなくて山羊だったりして、「食べたもんじゃねーよ」てなこともあります。まあ仕方ないですね。

食事へのお呼ばれは普通は昼食時ですが、とにかく時間に余裕を持って臨まないと焦ります。というのも、呼ばれてまず出されるのが先ほど申し上げたお茶（シャーイ）で、そのあとがコーヒー（ガホワと呼ばれます）、そして次がようやくカプサ。これで終わりかと思うとさにあらず。食後にコーヒーがまた出されて、最後にまたお茶。つまり逆の順序で収束に向かうわけです。これらが最初から用意されているわけではなく、火起こしや羊の解体などがその場で行われるのですから、とにかく時間がかかる。アル・ウラーという場所のベドウィンのテントに呼ばれたときには6時間くらいかかりました。しかもまずかった（泣）。

このように、食事のときはたつぷりと時間があるので、ホストとゲストはあれやこれやの四方山話をするのですが、じつはこれが重要なんです。お互いの情報交換の場になるんです。また有力アミールなどとの交渉ごとともこういう場でさりげなく行われます。ビジネスライクに必要なことだけ話して「はい、さようなら」というのは礼儀を知らない奴らのやり方で、教養人（ムアッダブといいます）は直裁的な物言いはしない。特に経験豊かな大物のアミールやシェイク（長老）になると、自分からはあまり話さず、相手に話させる。聞き上手とも言えますが、これが交渉ごとをリードするときの有利さにつながるわけです。私のような若造（当時）は一生懸命しゃべるのですが、大物はただ威厳を持って座ったままじっと聞いている。そして取り巻きの若い衆が私の話し相手になるんです。自分の情報は出さず、相手に情報を出させる。これは交渉のテクニックなのでしょう。そして面白いのは、例えば「ガイドを出してほしい」といった頼み事をこちらでしたときも、直接返答してもらった記憶がなく、ほかの四方山話に紛れて、結局食事がお開きになって帰る段になっても、「はたして伝わったのかなあ」「何しにここへ来たんだろう」と首をひねりながら帰ったのですが、翌日

になるとちゃんとガイドのベドウィンがキャンプへやってきて、問題なく作業に出発できたのです。

なお四方山話というのは決して話をはぐらかすためのものではなく、それ自体いろいろな重要な情報をはらんでいますし、そうした話が別の場面で役に立つことも珍しくありません。ですから真の教養人（ムアッダブ）は、いろいろな話を静かに、それも直裁性を回避する機知を伴って進めることのできる人ということになるでしょう。現代のビジネスマンにしてみれば「まどろっこしいなあ」「はっきりしないヤツだなあ」と映るかもしれませんが、こういう教養人こそ本当のビジネスマンかもしれないと思います。

さて今回の授業では、冒頭でこの調査には「報告」があると申し上げました。そこで最後にその「報告」を読んでいただきましょう。《堀内正樹 1990 「7章 移りゆく遊牧文化のゆくえ」『中東パースペクティブ』（板垣雄三編、第三書館、東京。Pp.165-194）。この調査から15年ほど経ってから書いたものです。決して嘘が書いてあるわけではありませんが、今日の授業でお話しした内容との距離感を感じていただければ目的達成です。「報告」というものの性格がつかめるはずです。お読みいただく際に便利ですので、私が作ったベドウィンの部族分布図を以下に掲げておきます。参考にしてください。



では今日はこの辺で。次回もサウジアラビアの話の続きで、地図を作るということの意味を考えてみたいと思います。

おわり

